

私達夫婦は今年で結婚4年目。子供の予定はまだない。

でも、子供がいらないからといってそれが問題になることはない。

妻の名前は美津子。そして私は夫である健一だ。

彼女は私が一目惚れした女性であり、そして私のことを愛してくれる人でもある。

「健一さん……今日もお仕事頑張ってくださいね」

そう言ってキスをしてるのが彼女の日課だった。

いつも笑顔で接してくれて、毎日美味しいご飯を作ってくれる。

こんなにも尽くしてくれる彼女に私はずっと惚れているのだ。

妻は普通体系で程よく肉が付いてる。胸のサイズはEカップ。

何より彼女の一番の魅力的な部分はお尻だろう。

そのお尻で誘惑されたら男なら誰だって我慢できなくなるはずだ。

男は妻のお尻をバックから突きたいと思ってしまう生き物なのだ。

そして私はそんな妻が男達から性欲の対象として見られてる事に対して興奮してしまう生き物です。

だから、私はよく妻にいやらしいイタズラを仕掛けてます。

例えば、お風呂に入る姿をスマホで撮影して、

私「おーし、これ会社でみんなに見せるわ！！」

妻「ちょっとー！だめよー！！」

なんてやり取りをしたり、またある時には、

たまにコインランドリーを利用する際妻に薄着のまま行ってもらったりなど、

色々やってきました。

最初は嫌がってた彼女だけど最近は慣れてきたのか、

「まあいいか！」みたいな感じになっています。

以前私が参加した同窓会で久々に再会して一緒に飲んだ、友人男性が我が家に来ます。

もちろん妻と会うためではなく飲み会をする為なのですが.....。

その時もまた妻には何かしらの事をしてもらうつもりです。

友人と言えば聞こえはいいかもしれませんが、実際は友人というより、ただの知人ぐらいの関係です。

彼は趣味でマッサージが得意らしく、それで妻を癒してもらおうかな？とも考えています。

この事は私の心の中で留めておくだけで他には言いふらすつもりはありません。

妻に今度友人が来ることは軽く伝えていたので、改めて詳しい日程を伝えようと思いました。

私「金曜の夜にこないだ言ってた、同窓会で久々にあった倉本って奴くるからよろしく」

友人の名前は倉本慎二。ちなみに女性のような名前ですが、れっきとした男性です。

妻「あーそうなんだ！了解！金曜日にね！」

私「金曜はちゃんとした格好で頼むぞ」

妻「ちゃんとした格好って？」

私「女性としてエッチな服装とか下着にしろってことだよ」

妻「えっ！？なんでよ！！別に普通の服で良くない？」

私「ダメダメ！絶対なんかエロい方がいい！その方が似合うし、お前を自慢した

いんだよ。笑」

妻「えー！じゃあどうすればいいのよ！」

私「とりあえずは下着はあのスケベなＴバックのやつがいいと思うけど...上はタンクトップとかでもいいんじゃない？」

妻「なんか変な目で見られたりしないかしら...」

私「大丈夫だって！俺も居るし！あと一応ノーブラの方が嬉しいかも.....」

妻「あなた、私を自慢したいんじゃないくて変態なだけじゃないの？」

私「男はそういうので簡単に興奮できる生き物なんだよ。」

妻「他人を興奮させる為にわざわざ妻をエロくするなんてどういう事よ」

私「俺の妻をエロい目で見てる、でもこいつは俺の妻なんだ！っていう優越感に浸れるわけよ」

実際は優越感などどうでもいい。あるのは妻をエロく見てもらいたい。その欲望だけだ。

妻「なにが優越感よ。私が男の人にそういう目で見られるとあなたが興奮するだけでしょ？」

その通りだった。実際私はそのシチュエーションを考えて勃起している。

妻「別に、あなたが良いならそれでいいわよ。好きにきなさいよ。」

妻も少し呆れた様子、いや、妻もまんざらではない。そんな気がした。

私「それじゃ、当日はよろしく頼んだわ」

妻「知らないからね。」

こうして妻は私によって性欲の対象として見られる事になるのだ。

俺の友人、倉本が妻に欲情して妻にセクハラをしたとして訴えられるかもしれない。

しかし私はそんな展開を望んではない。むしろ逆の展開を望んでいる。

倉本の性欲を妻にぶつけてもらって、妻がそれを快感として受け止めてくれれば最高なのだ。

妻は押せば断る事が出来ない性格だ。雰囲気流されやすい。それは私が一番良く知っている。

だから、倉本には妻に欲情して、妻の体に触れるなりして、どんどん攻めていてほしいと思っている。

そして妻もきっと気持ちよくなって、倉本を自分の性欲処理の為に利用するはずだ。

そんな妻の姿を想像しただけでも興奮してしまう。

倉本に妻を犯させてその様子をビデオカメラで撮影して、私に送ってほしいものだ。

そうすれば私は毎日オナニー出来る。

まあ、妻は絶対に渡したくないし、誰にも渡すつもりはない。

例えどんな状況になっても妻も根本では私を愛しているはずだし、私だって妻を愛してる。

ただ、私の性癖が特殊すぎるだけ。それだけなのだ。

そして、金曜日の夜になった。

今日は、倉本が来る予定だ。

家の最寄で待ち合わせして、倉本と合流した。

倉本「おー、なんか同窓会以来2回目なのに、いきなり家に行くって緊張すんな。」

私「居酒屋より周りを気にしなくていいから楽だよ。それに妻も喜ぶだろう

し。」

倉本「奥さん、綺麗な人だから楽しみにしてたんだよ。」

私「画像でしか見せてないからあんまわからないだろ。笑」

倉本「実物見たらもっと美人なのは分かるよ。笑」

そう、同窓会の時に意気投合した倉本に、私は妻の画像を何枚か見せていたのだ。

妻が写っている写真は、普段着姿の妻。

だけではない。

私はお酒も入っていたせいで、妻の恥ずかしい画像も見せてしまっていた。

着替え中の妻、Tバックでお尻丸出しの妻、タンクトップにノーパンで陰毛をさらけ出してる妻。

見せるだけならまだしも、LINE 交換をしてメッセージを送る時に、その場でふざけてその画像を送ってしまった。

倉本はその画像に対して

倉本「これでめっちゃシコるわ！笑」

と、言ってきた。

私はお酒も入ってるせいか興奮してしまい、倉本を煽る。

私「おう。俺のエロい妻のまんこ使ってくれ！俺が許可する！」

倉本「とりあえずこのケツ、バックから激しく突きまくるわ！」

私「おう！ガンガン突いてやれ！俺が許す！」

こんな感じでやり取りをしていた。

今思えば、倉本はお酒があまり好きではないと言っていたので、お酒を大して飲んでいなかった。

ウーロン茶やコーラがメインで、お酒は付き合い程度にしか飲んでなかった。

という事は、あいつは素面であんな事言っていたのか。記憶もハッキリしていたのだろう。

酔った勢いで言った言葉ではないのは確実だ。

もし、妻にその事を知られたら...

でも、妻は多分怒らないと思う。

むしろ、妻も倉本の性欲をモロに受けてみたいと密かに思うに違いない。

そんな事を考えてるうちに、自宅に着いた。

私「ただいまー！！」

倉本「お邪魔しまーす。」

妻「おかえりー！あ、こんばんはー！」

妻が出迎えてくれた。

妻はタンクトップにぴっちりとした白いスカート。かなり短い、これはエロい。

流石にノーブラではないようだが、谷間がくっきり見える。

倉本「こんばんはー！はじめまして！倉本です！」

妻「初めまして！旦那の健一がお世話になっております。」

倉本「いや、同窓会の時に久々に会っただけで、何もお世話してないですよ！笑」

妻「あーそうでしたね！笑」

倉本「こちらこそ、奥さんにはたくさんお世話になってます！笑」

倉本がニヤついて妻を見る。

妻「いえいえ、何もお世話なんて！！」

当然の返しだが、妻は何も気付いてない。

こいつの「お世話になってる」が、どういう意味なのか。

妻「どうぞ上がってください。」

倉本「ありがとうございます。おじゃまします。」

倉本が靴を脱いで家に上がる。

妻「どうぞ、スリッパ使ってください。」

倉本「すいません、どうもどうも。」

倉本が妻の後についてリビングに上がった。

私は倉本の後ろからついていく。

その時私は妻の後姿を二度見した。

なぜなら、妻の白いスカートが

透けてる...？

私が透視能力があるわけではない、あれは間違いなく透けてる。

そして、妻の下着はやはりスケベなＴバックだった。

私にはわかる。あのＴバックは妻のお気に入りなのだ。私は興奮して倉本を煽りたくなる気持ちを抑えた。

倉本はきっと妻のスカートが透けて、下着はもちろん、お尻も鮮明に見えてる事に気が付いてるだろう。

妻の真後ろにいるのはあいつなのだから。倉本は妻を凝視している。

正確には、妻の透けたお尻を見ている。私にはわかる。

倉本は妻のお尻を見て、興奮してるのだ。

倉本はきっと、妻を犯す事で頭がいっぱいになっているはずだ。

私は妻の後ろにいた為、妻の表情はわからなかった。

しかし、倉本は興奮して鼻息を荒くして妻のお尻を見ている。

妻がその事に気付かないはずがない。

妻「どうぞ、座ってて下さい。」

倉本「失礼しまーす。」

妻「ゆっくりしててくださいね。」

妻がキッチンに向かった。

倉本「いやあ、きれいに整理されてていいな。」

私「だろ？」

倉本「うん、俺の家より全然広いし。」

私「そりゃあ一人暮らしなんだろ？広くなくても十分だろ！笑

倉本「そうだよな！笑」

私達はリビングのソファーに座り、テレビを見ながら談笑した。

しばらくすると、妻がおつまみを持ってきてくれた。

妻「はい、お酒は何飲みます？」

倉本「俺はお酒弱いんで、とりあえず最初だけビール頂きます！」

妻「はい。健一は？」

私「じゃあ俺もビールで。」

妻「了解！」

妻はそう言うと、冷蔵庫から缶ビールを取り出した。

倉本「奥さんはお酒強いんですか？」

妻「んー、普通かなー。」

私「いや、全然普通より弱いから！妻は下戸だから！笑」

妻「ちょっと健一！そういう事言わなくていいから！！笑」

倉本「えっ、そうなんだ！じゃあ俺と一緒にじゃないですか。笑」

私「お前はお酒飲めないんじゃないくて、飲む気ないだけだろ！」

倉本「バレたか！笑」

妻が微笑む。

妻が私達のやり取りを見て笑っている。

妻は私の隣に座って、三人で乾杯をした。

時間が経つにつれて、お酒の力もあって会話も弾んできた。

倉本と、学生時代の話など話した。

妻とも共通の話題があり、話は盛り上がった。

そして、段々と会話があっちの方にシフトしていった。

倉本「奥さん、綺麗だしスタイル良いですね！羨ましいなー！」

妻「いやいや！そんなこと無いですよ！」

妻が照れながら謙遜する。

倉本「奥さんみたいに、胸大きくてウエストは細い、そしてデカケツ！言う事なし！！笑」

妻「デカケツっていうのは、褒めてます？それとも馬鹿にしています？？笑」

倉本「いやいや！もちろん両方です！笑」

妻「もう！ちょっとー！！笑」

妻が笑いながら倉本の腕をペチッ！っと叩く。

私は二人のやりとりを見ていて、腹が立つ瞬間もあるが、興奮もしていた。

妻が恥ずかしそうにしながらも、楽しそうにしている。

私「おい！あんまり妻の身体をジロジロ見るな！笑」

倉本「はいはい！笑でも仕方ないじゃん！奥さんのお尻大きいし！触りたくなっちゃうんだよ！それに、奥さんだって俺の股間見てるでしょ！？」

妻「えっ、やだー。笑」

妻が顔を赤くしながらも否定はしない。妻も倉本の下半身が気になっていたようだ。

それはそうだ。倉本はズボンの上からでも分かるくらい勃起しているからだ。

倉本のはかなり大きい為か、股間から片方の太ももにかなりの膨らみが見える。

倉本が一旦トイレへと席を外す。

そしてすぐに私のスマホに通知が来る。倉本からのLINEだ。

「お前の奥さんやばいわ、めっちゃ犯してー」

普通ならこんなLINE送ってこない。長年の親友ならまだしも、同窓会で久々に会って軽く意気投合しただけ。

学生時代もお互いの存在を知ってたぐらいで、深い関わりはなかった。

それがいきなりこんな事を言うなんて、こいつ...

私は興奮して、倉本に返信した。

「俺がチャンス作ってやるから、好きに性処理に使え」

すると、すぐ既読がついた。